

## 著者が青春時代を送ったカルフ

### 作品を読んでから半世紀目の訪問に感動

定年から10年目、新鮮な感動と共感を持って作品を読んでからちょうど50年あまり。私は長年の夢がかなって、ヘルマン・ヘッセの生まれたドイツの田舎町カルフを訪れた。乗り換えた途中駅からは山岳鉄道のような一両だけの列車。私と同時に駅に降りたのは3人のみ。歩を進めた先は実に静かな美しい町だった。周囲を山々に囲まれた谷のあまり広くない空間に、レンガ色からオレンジ色の4・5階建ての木造の家屋が並んでいる。まるで写真で見るスイスの山中の光景のようだ。



日曜日のせいかもしれない。道路沿いのレストランの外のテラスでは地元の男性がビールを傾け談笑していた。道路も広場もそぞろ歩く観光客しか見えない。気がついたことは **赤レンガの屋根が続くカルフの町**。ドイツの大都市では通ずる英語がとても通じにくいことである。途中で会った気のよさそうな壮年にヘッセ博物館を尋ねたところ、身ぶり手ぶりで元気いっぱい教えてくれた。ところが指示された通りに行ってみるも、まったくそれらしき建物は見当たらない。再度、近くを歩いている壮年に確認した。

「あなた、まったく反対の方向に来ていますよ。ここからじゃ教えても難しいと思うから、私が一緒に行ってあげますよ。きっと教えてくれた人も、むげに断るとあなたに悪いから、思いつくままを言ったんですよ。親切もこれだともう一歩ですよねえ!」。そう言って案内してくれる壮年の、今度は本当にありがたい親切・・・。

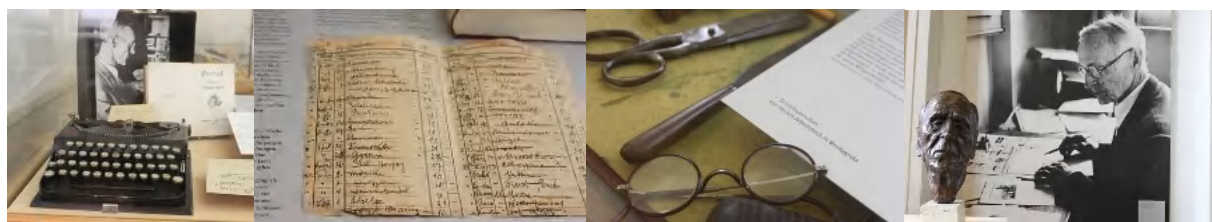
物語は高校時代の夏休みに初めて読んだ。ドイツの優秀な若者が厳しい神学校の規律と生活の中で懊悩し、最終的に死に至る、という筋書きだった。たまたま同じドイツのゲーテの作品「若きヴェルテルの悩み」の主人公が、思うようにならない恋愛からピストル自殺をしたのに対して、こちらは未来ある若者が川に落ちて死ぬ、というストーリー。希望に燃えて青春を生きようとする若者たちにとって、共感がある半面、何か割り切れないものがあるような気もする。



ヘルマン・ヘッセ博物館

秀才ハンス・ギーベンラートは生まれた村の期待を一身に担ってシュツットガルトの神学校で勉学に励むが、ヘルマン・ハイルナーとの友情、エンマとの淡い恋の中で、学業から遠のき、やがて生まれた村に戻ってきて、職工として働くことになる。そして酒を飲みすぎ川に落ちる。作品はマウルブロン修道院で過ごしたヘッセ自身の青春の

苦悩が基軸になっている。氏の数ある作品の中で『車輪の下』はとりわけ日本人に読まれている。それは受験地獄と学歴優先社会の現代の日本にも通ずる何かがあるからだろう。



タイプライター      作品の草案を綴ったメモ      ヘッセは大変な近視だった      高齢をおして執筆活動

ここでは筆者が特に感銘を受けた文章を「あらすじ」がわかりやすいようにストーリーに沿って綴っていく。(井上正蔵訳 集英社 世界文学全集 32 から)

p 114 シュワルツワルトのこの小さな町から、こんな少年が生まれたことはいままでに一度もなかった。

p 117 ああ、魚釣り。釣りのことなんかもうすっかり忘れてしまっていた。去年、受験勉強のために釣りを止められたときは・・・

p 127 エンマはこの町で一番かわいらしく上品な女性で、ハンスとは同学年だった。あのころ、エンマと語り合いたいとか、手を握り合いたいとか、そんなことばかり願っていた時期があった。

p 161 不釣り合いな組み合わせの友達もあった。一番不釣り合いだと思われたのは、ヘルマン・ハイルナーとハンス・ギーベンラートだった。軽薄な少年と良心的な少年、詩人と努力家という両極端のふたりだが、どちらも頭がよく、才能あるトップグループに数えられていた。しかし、ハンスが模範生という評判が高かったのに対し・・・

p 176 「うん、これでよし。へたばらないようにするんだよ。さもないと**車輪の下**に押しつぶされてしまうよ」

p 187 ハイルナーは放校という不名誉な処分を受け・・・

p 193 ……場所を見つけてそこを死場所と決めた。何度もそこへ行ってはすわりこみ、自分がいつか死体になって発見されることを想像して、不思議なよろこびを覚えた。縄をかける枝も見当をつけて、その強さも確かめた。

p 210 エンマは、垣根ごしに手を差し出した。ハンスはおそろおそろその手をやさしく取って、軽く握った。その手が引っ込められないとわかると、勇気を出して、あたたかい娘の手を用心深くそうっと撫でてみた。・・・今度は頬にあてた。・・・うっとりとするような疲労が・・・

p 211 ハンスは娘の唇が燃えているのを感じた。その唇がひた押しに迫ってきて、ハンスの生命まで飲み干そうとするかのように、むさぼり吸っているのがわかった。・・・ふるえるような快感が気の遠くなるような疲労と苦痛に変わった。

p 215 エンマはもう一度ハンスの手を取って、ふざけながら自分のコルセットの下に押し

込んだ。すると、ハンスは、これまで知らなかった肉体の脈拍と呼吸をこんなに熱く近く感じて、心臓が止まり息が詰まって、いまにも死ぬのではないかと思うほどだった。

p 216 ハンスにとっては甘さよりも、苦味のほうが多かった。

p 219 ……自分の手で、何かはっきりとした実用のもので作り出すというよろこびを味わったのはこれが初めてだった。

p 225 こうやって、陽気に日曜日を過ごし、しごく当たり前のような顔をして、人生を解し、楽しむことを心得ている連中と一緒に、料理屋のテーブルに向かって腰をかけているのは、やはり悪い気はしなかった。

p 230 どうしてハンスが水に落ちたか、知っているものはいなかった。

p 230 「あんなにできがよくて、万事うまくいっていたんだがね。学校も試験も、それが急に不運が重なって……」



博物館前の広場（左から3軒目がヘッセの生家と入り口）

訪問者台帳に感動を書きこんだ（右側）

博物館はヘッセの生家から石畳を50歩ほど歩いた先にあった。木造の大きな4階建て。展示室の入り口にあった訪問者の署名簿に、私は50年来の夢を叶えて訪れた感動を書きこんだ。

——長野県での高校時代。担任の先生に勧められて夏休みに読んだ一作が『車輪の下』だった。高校はクラブ活動も活発だった（野球部は甲子園に3回出場している）。勉強も大変だったが神学校と違って厳しい規律もなく校風も伸び伸びとしていた。ところが私自身は卒業時の受験に失敗してしまった。浪人を覚悟した矢先に母親が脳溢血で倒れ入院、進学は断念せざるを得なかった。未来への不安をかかえながら東京に出て中小企業で働くことになった。やがてそこで創価学会を知り入会した。そこから再び大学進学を決意し現在まで道を開いてくることができた。

ハンスも学問の世界から職工の道に進んだ。事情はまったく異なるけれども、作品は苦難に耐えていく勇気を与えてくれたような気がする。「大切なのは始めることであり、目を開くことなのだ」（高橋修訳「小さな喜び」、『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集第4巻』）とも言っている。幸いに私の場合「車輪の下」に押しつぶされなくて済んだのである。そんな感謝の思いを署名簿1ページに英語で綴ったのだった。

日本からの訪問者も多いようだ。受付で借りた携帯の音声ガイドには日本語も入っていた。展示室ごとの説明を並べていくとヘッセの生涯がわかるようになっている。その8つの展示室のガイド内容を列記すれば：

- ① なぜ『車輪の下』が読まれるのか。それは読者がヘッセの作品の中に自分の人生を重ね合わせようとしているから。
- ② キリスト教が彼と作品に与えた影響。
- ③ 生まれてから最初の15年間の町の広場や生家。
- ④ 両親のもとから離れた時代。貧しかったので国の奨学金を受けることができた。マウルブロン修道院で両親の希望通り神学の勉強を始めた。
- ⑤ 20歳で独立し書籍販売業にも携わった。それを踏み台として作品を書くことも始めた。
- ⑥ スイス、イタリアから自然の生活へ。9歳年上の女流写真家と結婚、ここでトルストイとソローが理想とする生活をしようとした。長男ブルーノが誕生した。
- ⑦ その後50年間スイスにとどまる。まずベルンに。
- ⑧ 第二の故郷アルプスの南レイ地方に住む。戦時中に抑圧されていた表現への願望を爆発させた。



広くない町のあちこちにヘッセの像があった。美しいカルフの町もヘッセなしでは語れない。鉄道駅から比較的広い車道を横切ってすぐに川があった。著者が若い時に釣りをしたという川である。そこから歩いて約5分、実はヘッセ博物館は（方向を間違っささえいなければ）すぐ近くだったのだ。（ヘッセが釣りをした川とその橋の上で一緒にポーズ）

